Tales of Trust ―信じることを知るRPG―

keim

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目の前にあることも
今まで教わってきたことも
世界の何もかもが
本当に何もかも嘘だったとしても
最後の最後まで君を信じるよ。
Ｔａｌｅｓ　ｏｆ　Ｔｒｕｓｔ　―信じることを知るＲＰＧ―
聖騎士候補の少年と聖女見習いの少女が世界の闇にぶつかったとき、全てが動き始める。

いわゆる　オリジナルテイルズオブ　です。
原作キャラは一切登場しません。

目　次

パーティーメンバー紹介 ―――― 1
用語集 ―――― 5
第一部 ”破門”編
プロローグ ―――― 8
1．最終試験の前に　side：アンネ ―――― 11
2．聖女見習い　side：アンネ ―――― 13
3．ダレン・ジョーカー　side：ダレン ―――― 16
4．最終試験　side：アンネ ―――― 20
5．ミカハヤヒ　side：ダレン ―――― 25

パーティーメンバー紹介

「ヒーロー参上っ……て柄じゃねえなぁ……」

ダレン・ジョーカー

男／１８歳／１７７ｃｍ／人種・フェデーレ

契約神・ミカハヤヒ／紋章・右手

武器・剣

本作の主人公。聖騎士を目指し試験を受けに来た青年。その動機は不純極まりなく「聖騎士になって各地の名産を貢がれたい」。信仰心など皆無であるが、腕が立つため本試験にまで残った。

性格は自由気ままな単細胞。若干ナルシスト。「全てにおいて食欲と睡眠欲が優先される」と豪語しその通りに生きるダメ人間である。だが、その本質は誰よりも優しく不器用。

最終試験で邪神とされるミカハヤヒに見初められ、使徒として刻印される。それ以降、火属性の技・魔法が使えるようになった。

ステータスは平均的。突出するものもなければ、足りないものもない。器用貧乏とも言えそうだが、どんな場面でも立ち回れるオールラウンダー。

ボサボサの茶髪にやる気の削げたような目が特徴。

「私は人を助けたい。そのために、巡礼者になる」

アンナリーザ・ブライトマン

女／１６歳／１６３ｃｍ／人種・フェデーレ

契約神・??／紋章・??

武器・棍

本作のヒロイン。聖女見習いとして幼い頃に親元を離れ修道院で育った少女。女神アシリアを信仰している。人々を救いたいという思いを強く持っており、聖女になりたいという思いも人一倍強い。本試験でダレンと組むことになった。

聖女というには些か気が強く、意思を容易に曲げない。どんな困難にも負けない強いメンタルと不屈の精神を持つ。その一方で理想と

現実の狭間で苦悩することもある。主人公よりある意味主人公らしい。
最終試験で突如として回復魔術が使えるようになった。紋章は無く、どの神と契約したのかわかっていない。
状態異常解除・回復・バフが使えるヒーラー。後衛支援が主な戦闘スタイル。武器のリーチが長いため、敵を近寄らせないように立ち回ることも可能。
赤毛を三つ編みにし、肩にかけている。巡礼用のローブを羽織っているが、その下はロックな格好をしている。

「この辺で止めとかない？俺もあんたも傷付きたくないでしょ」

ファルカタ
男／??歳／１６８ｃｍ／アンシェント
血統・??／刺青・左手首
武器・徒手空拳
純血アンシェントの男性。化け物じみた身体能力を持つため武闘派系の血族ではあるらしいが、血族名は名乗らない。各地をふらふらと放浪している。料理が得意。
基本的に陽気でテンションが妙に高い。愛想が良く人懐っこい。笑顔を絶やさない。”死なないこと”が信条。世話焼きで面倒見がいい。強敵が相手だと一族の血が騒ぐようで、戦闘狂的な一面が顔を出す。
物攻・物防が高い反面、術防は極端に低い。近接戦闘では無類の強さを誇る。
少々癖のある黒髪。純血のアンシェントの例に漏れず小柄で、見た目が若い（本人曰く”君達が思ってるほど若くないよ”）。

「世界をぶっ壊す。それが私の生きる意味さ」

ペトラ・リュシール
女／１８歳／１６９ｃｍ／ヘレティック
契約神・オモイカネ／紋章・右太腿

武器・二丁拳銃
自称・歴史家の女性。真の歴史を明らかにすることが自分の使命と考えている。教会に危険視されており、第一級異端者として命を狙われている。
好奇心旺盛で大雑把。興味のあることには身を乗り出すほどに熱中するが、興味ないことには完全無視という極端極まった人。ダレンとタメをはれるほど、だらしない。
オモイカネとの契約により土属性の技・魔術が使える。移動速度・攻撃速度はかなり早い。一撃の威力は低いもののＨｉｔ数の多い技が豊富なためコンボ稼ぎ・足止め要員として立ち回れる。
黒髪を緩く１つに纏めている。露出度の高い服装を好むが露出狂とかではなく、動き安くて涼しいから好きらしい。

「か弱きものを守る、正しきを貫く。それが聖騎士です」
クリスティアン・ホワイト
男／１９歳／１７６ｃｍ／フェデーレ
契約神・ツクヨミ／紋章・左目
武器・槍＋盾
聖都シスリアの聖騎士。聖女・聖騎士の間では”騎士の中の騎士”として有名な存在。二つ名は”女神の盾”。
ダレンに”女好きキザ野郎”と言われるほどに、どんな女性に対しても甘く優しい。一方で男性に対しては求めるものが高く厳しい。因みに女好きではない。超真面目で融通が効かない。かなりの努力家。一途で思い込みの激しい面もある。ダレンとは合わないらしくよく反目しあう。
ツクヨミとの契約により、闇属性の技・魔術が使える。攻撃速度・移動速度は低い。術防・物防が高く状態異常に掛かりにくいため、仲間を守りつつ戦うことが可能。
サラサラの金髪に碧眼、甘い顔立ちとダレン曰く”反吐が出るほど理想の白馬の王子様”。

「ごめんなさいいい!!　私がダメだめの屑うなのでこんなことに……」

たまも　みこころ

女／??歳／１５５ｃｍ／アンシェント

血統・竜脈の守護者／刺青・左鎖骨

武器・杖

”竜脈の守護者”の末裔。守護者の務めとして各地の竜脈を治め、異常がないか見守る旅をしている。

所謂二重人格である。主人格は内気で弱気、自分のことを卑下しまくりな女性である。副人格は、冷静沈着で合理主義者な女性。主人格のことを”みこころちゃん”と呼び、自分が副人格であることを理解している。主人格は副人格の存在に気付いていない。

竜脈からマナを集め空気中に還元する能力を持つ。そのため、あらゆる属性の魔術を使いこなす。術攻・術防はパーティー内で最も高いが、反面物攻・物防は低い。後衛アタッカー。

ストレートの長い銀髪。洋服の上に一枚薄手の着物を羽織っている。純血アンシェントの例に漏れず、外見が年齢詐欺で小柄。

用語集

随時更新予定

聖戦

……女神アシリア率いる善神と邪神・悪魔達による戦争。地上を脅かす悪魔や邪神達を女神アシリアが打ち破り、人々を救ったとされる神話。女神アシリアはこの戦いの後、眠りについたとされる。

女神アシリア

……天上の神々の頂きに立ち、天上・地上を統べる偉大な女神。地上に住む人々を愛し守護する女神とされている。邪神や悪魔を封印し、現在は永き眠りについている。自身の代わりに地上の安寧を守らせるため、聖女達に力の一部を分け与えているとされる。

アシリア教

……女神アシリアとその配下の善神を崇拝する宗教。いつか来る、女神アシリアによる救済の日まで女神の教えを守り続けるよう説く。世界の中核をなす宗教である。かなりの権力を有する。

巡礼者

……各地を訪れ女神の教えを説く存在。聖女と聖騎士の二人組である。病や怪我を癒し魔物を退ける役目も担うため、人々からの信頼が厚い。羨望の的である。3年に一回、試験が行われ合格した一組のみが巡礼者となる。最終試験は過酷であり死者が出る。

聖女・聖女見習い

……巡礼者の女性を聖女と呼ぶ。女神アシリアから授かった癒しの力を持つ。女神アシリアの使途とも呼ばれる。

聖女を目指し各地にある修道院に入った少女は聖女見習いと呼ばれる。本人が物心つく前に親によって修道院に入れられるケースも多い。聖騎士とは異なり、聖女になるには修道院に入ることが絶対条件である。

聖騎士・聖騎士候補

……巡礼者の男性を聖騎士と呼ぶ。女神アシリアの配下である善神の力を授かり、魔物を退ける。女神の使徒たる聖女と民衆を守るこ

とが役目。
聖騎士を目指す少年は聖寮に入ることが一般的。聖騎士になるには必ずしも聖寮に入る必要はない。聖寮に入った少年及び、巡礼者選定試験に参加する男性を聖騎士候補と呼ぶ。

善神

……女神アシリア配下の神々。天上に住まう。地上に住む人々のために力を授ける。

フェデーレ

……人口の7割を占める人種。”女神の良き信徒”とも呼ばれる。アシリア教を信仰する正しき民とされるが、ダレンのように大して信仰していないのもまあまあいる。5歳の頃に全員、フェデーレの紋章を体に刻印される。（刻印される箇所は地域により異なる）善神や女神アシリアに力を授かったものは、フェデーレの紋章が変化し善神やアシリアのものになる。

邪神

……地下世界に住む神々。地上や天上を脅かす存在とされる。善神と同じく、地上の人々に力を授ける。

ヘレティック

……人口の2割を占める人種。”異端者”“破門者”とも呼ばれる。体に邪神の紋章を持ち、邪神から与えられた力を行使する。教会のある都市に入ることは禁じられており、ヘレティックであることがばれれば即刻処罰・処刑されるため多くは独自のコミュニティを形成し暮らしている。稀に紋章を隠し、フェデーレに紛れて生活する者もいる。

紋章

……フェデーレの紋章・アシリアの紋章・善神の紋章・邪神の紋章の四種類が存在する。フェデーレの紋章とアシリアの紋章は見た目にも分かりやすい。善神の紋章と邪神の紋章は種類が豊富。一般人の大半が区別の付け方を知らない。が、それなりに高位の聖職者ならばおおよその見分けがつく。

アポストル

……アシリアの紋章・善神の紋章・邪神の紋章を持つものの総称。神の力の一部を得るため、魔術を行使することが可能。また桁外れの身体能力を得る。

紋章を持つものは、力を与えた神と同じ属性の術技が使用できるようになる。

契約神

……自身に紋章を与えた神を契約神と呼ぶ。

アンシェント

……人口の1割とされるが実際はその半分も残っているかわからない人種。”古の血族”とも呼ばれる。多くの一族が存在するが、アポストルを越える身体能力を持つ”武闘派”と独自の魔術体系を持ち高威力の魔法を操る”竜脈派”の二つに大きく分けることができる。

”化け物”と恐れられ迫害や弾圧を受けてその数を徐々に減らし続けて来た。赤の粛清以降、ほぼ街中で姿を見ることは無くなった。一方で教会に恭順する一族も存在する。

純血のアンシェントは一族の証である刺青がある。フェデーレやヘレティックと比べて小柄、実年齢より若い見た目を持つ。また、ダレン曰く”変人奇人の巣窟”。

赤の粛清

……前教皇により行われた大規模なアンシェントへの弾圧。8年間続き、10年前に教皇の死によって終結した。赤の粛清により多くの一族が滅亡・壊滅した。また、赤の粛清末期には教会と粛清に反抗するアンシェント間で戦争も起きている。

赤の粛清以降、多くの一族がフェデーレ・ヘレティックとの関わりを避けて辺境に移った。

戦争に関わった一族は今でも粛清の対象である。

第一部 ”破門”編

プロローグ

目の前にあることも
今まで教わってきたことも
世界の何もかもが
本当に何もかも嘘だったとしても
最後の最後まで君を信じるよ。
Ｔａｌｅｓ ｏｆ Ｔｒｕｓｔ ―信じることを知るＲＰＧ―

かつてこの地は　邪神率いる悪魔達に蹂躙された。
草木は枯れ　大地は燃え　海は死に絶え
空は淀んだ。
人々は死に絶えるのを待つほかなかった。
絶望のなか　紅き少女が立ち上がった。
少女はその身を削り　神に祈りを捧げた。
その祈りを　女神アシリアが聞き届けた。
女神は人々を哀れみ　この地に降り立った。
女神は悪魔達を地の果てに追いやり
邪神を封じ　荒れ果てた世界を再生した。
そして力を使い果たし　長き眠りについた。
女神は眠りにつく前に　こう言い残した。
「我は再び目覚める。
その時が訪れるまで　教えを守り続けよ」
女神の教えと　預言者の言葉を守り続けよ。
いつか来る救済の日まで。
＜アシリア教　女神のこと＞

この世界に生まれた人は皆そう教えられる。
”女神様の教えを守りなさい”

”女神様を信じなさい”
”女神様はいつでも私たちを見ている”
”悪いことはしちゃいけない”
それを当然のように受け止め生きていく。
女神アシリアを信仰し、女神の教えを守る。
そうすれば女神が救済してくれる。
女神に使える聖職者になることが、最も良いこととされる。
特に”巡礼者”に皆なりたがる。
厳しい試験を潜り抜けた聖騎士と聖女の二人。
彼らは女神の教えを各地に説いて回り、人々を魔物から守り、怪我や病を癒す。
巡礼者は英雄だ。
逆に、女神に逆らって破門されてはいけない。
教えを破ったものたちは、体に破門者の証を刻印される。
破門者達は女神の敵。
破門者は救済され得ない存在。
彼らは邪神に使えるもの。
彼らは処刑されねばならない。
……それが当然の摂理だと思って生きてきた。
何も疑いを持たなかった。
女神が絶対正義で揺るがないのだと。
じゃあ……この目の前の光景は一体、何？
円形の殺風景な部屋。
そこに閉じ込められた２０人。
先程まで和気藹々と話していたのに。
……今は殺しあっている。
生き延びるために。
皆の憧れの”巡礼者になるため”に。
聖女見習いの少女は、ローブの裾を固く握りしめた。
これが女神の望むことなのか。
信者たちが血で血を洗うことを女神は望むのか。

本当に？
足元がぐらつくような感覚がした。
今まで信じてきたものが壊れていく。
何が本当で何が嘘なのか。
何もわからない。
「ぼけっとするなよ。
……死ぬぞ」
パートナーの聖騎士候補の少年に手を引かれて少女は我にかえった。
「うん。……ごめんなさい」

1．最終試験の前に　ｓｉｄｅ：アンネ

ようやくここまで来た。ずっと憧れてきた存在に、ようやく手が届く距離まで来た。
あと、少し。
不安はある。でも、やれることをやるだけ。
人を助ける、人の役に立ちたいって気持ちは誰にも負けない。怖じ気付いてたまるかっての。
聖堂の壁に貼られた、第五試験通過者の名前をもう一度見上げる。そこにある私の名前を見るだけで、鼓動が早くなる。ドキドキしてる。
不安と緊張とそして、きっとこれは高揚感。
明日が最終試験。
それに合格すれば、女神アシリア様の力を賜って、私は聖女になれる。巡礼者になれる。
この手で傷付いた人を救えるようになる。
医術じゃ救えない人も魔術で救えるんだ。
自然と笑みが溢れて、あわてて表情を引き締める。
まだ試験が残ってる。浮かれるには早いぞ、私。
軽く頬を叩くと回りの喧騒が帰ってくる。
喜ぶペアや、泣き崩れるペア。悲喜こもごも。
何れにせよ、聖女見習いと聖騎士候補の二人組で感情を分かち合っている。
私以外は。
私だけ一人ぼっちだ。
……私にもパートナーはいる、でもこの場にはいない。
９：００に合否発表があるから来てって、私は言ったよね。
私悪くないよね。
……あのバカ面が脳内でちらつく。
やる気をどっかに置いてきたような顔。寝癖が付いたままのよう

なボサボサの髪。
私のパートナー、聖騎士候補のダレン・ジョーカー。
自堕落を絵に描いたような男。
どうしてあんなやつが本試験に進めたのかって思うほどに、女神様への信仰心皆無だしダメ人間。
良いところは剣の腕しかない。
どうしてあんなのが、私のパートナーなんだろ。
例えば仮に私が聖女になったら、あいつも聖騎士になる。つまり、私とあいつで巡礼者として活動することになる。
……先行き不安だわぁ。
どうせなら、女神の盾って言われるホワイト様みたいな人がパートナーなら……ね。
一度だけ目にしたことがあるけど、素敵な人だった。
……こんなこと考えてたってしょうがない。
とりあえず、ダレンを探しにいかないと。
確かあいつ、私が９：００には来てって言った時に
”９：００とか普通の人間ならまだ寝てる時間だろ”
とか言ってたっけ。
つまりまだ寝てるのかな。
一体どんな神経してるんだろ。
自分の進退が決まる発表がされてるのに、寝坊するとかさ。
とりあえず、あいつの宿泊先、覗いてみようか。
「ちょっとごめんねー!!
通してくれない？　私用事があって」
周囲にいたペアが何事かと私に視線を送ってくる。
そんな目向けないでよ。
人混みを掻き分けて、聖堂の外に出た。

2．聖女見習い　ｓｉｄｅ：アンネ

聖堂を出ると、一斉に聖女見習いに囲まれる。
なんか有名人になった気分……。
でも、みんなどうしてここに？
「アンネ!!　どうだった？」
アンネっていうのは私の渾名。
アンナリーザって長いし、言いにくいからって。
誰が呼び出したんだっけ？
気に入ってるから、良いんだけどね。
「大丈夫だったよね？」
「やけに出てくるの早かったけど」
「ねー、結果は？」
聖女見習いの友人達。
……私のこと気にしてくれてたんだ。
「えーと、通過してた」
一斉に歓声が上がる。
みんな、通過できなくて落ち込んでたのに私のこと喜んでくれるんだ。
私がみんなの立場だったら、どうだろう。
ちょっと悔しくてやっぱり嬉しいかな。
この日が来るまで、みんなでずっと過ごしてきたんだから。
友達っていうより家族みたいだし。
「……ありがとう」
「嬉しそうな顔してなかったから、落ちちゃったのかと思ったよ」
マルガレッタが抱きついてくる。
マルガレッタは武道が得意。
私、よく棍の修練に付き合ってもらってた。
その反面、マルガレッタは勉強が不得意だったから私が教えてたけど。

彼女は試験に落ちた後”聖女なんて柄じゃなかったかなー。体動かすの得意だし、騎士団に入ろっかな。女神様に仕えられることには変わりないしね”とか言ってた。
騎士団っていうのは教会御抱えの武装組織。
聖騎士と名前は似てるけど別物。
聖騎士は女神の写し身なんて言われる聖女の守護が主な役目。
騎士団は教会と信徒を守ることが役目。
騎士団にはいって功績をあげていけば、善神に認められて紋章を授けられることもあるんだとか。
……もし私が明日落ちたら、そういう道も……いやいや弱気になるな私。
「明日は最終試験ですね。
アンネさん、頑張って下さい」
クラリッサが微笑みかけてくれる。
クラリッサはお姉さんみたいだ、同い年だけど。
修道院には、本当の家族の顔を知らない・覚えていない子もいっぱいいる。
私もその一人だったりする。
だから聖女見習いのみんなは家族みたい。
「ありがとう、頑張る。
……みんなの分も」
「……ところで、アンネ。
あんたのパートナー、どうしたの？」
……。
あー……そうだった。
ダレン引っ張ってこないと。
「ちょっとトラブってるみたいでさ。
……今から迎えに行こうと思ってて。
じゃあ、行ってくる!!」
「大変だねー、アンネ」
聖女見習いのみんなが笑う。

いやほんと、笑い事じゃないよ。
みんなの想像以上に、あいつ普通じゃないから。
あんなに信仰心の薄い人間、みんな見たことないでしょ。

3．ダレン・ジョーカー　ｓｉｄｅ：ダレン

うるせえ!!
なんだよ、工事か!!
それとも下でパンでも作ってんのか。
ふざけんじゃねえ、寝れないだろうが!!
さっきから耳障りな音がして、眠気が薄れていく。
渇いた木材に何かをぶつけるの音。
つまりあれか。
勢いよくドアを誰かがノックしてんのか。
これは文句を言わないと気が済まない。
人の安眠を邪魔するとか、万死に値する。
布団を勢いよくはね除けて飛び起きる。
「今、何時だと思ってんだあああああ!!」
ドアまで一気にダッシュ。
「９：３０だボケえええええ!!」
勢いよくドアがあいた。
目の前に星が飛んだ。
ドアと顔面が追突事故を起こしたらしい。
痛い痛い痛い。
これ、鼻とか折れてない？
鼻血とか出てない？
思わず鼻を押さえて踞る。
「天罰よ」
冷たい声が上から降ってきた。
視線だけを上に向けると、アンネが冷めた目を向けてきていた。
こんにゃろう。
なーにーがー天罰だ。
「まずなぁ、聖女見習いが”ボケ”はないだろ」
「ボケにボケって言って何が悪いのよ」
口が悪い。

未来の聖女様予定らしからぬ口振りだ。
こいつに会うまで、聖女見習いって虫も殺したことない大人しくて可憐な女の子ばっかりだと思ってた。
とんでもない勘違いだ。
虫どころかボアぐらいなら手で捻り潰しそうなくらい逞しくていらっしゃる。
「口悪いなぁ、おい。
てるてる坊主みたいな見た目してるくせに」
聖職者が外に出てるときに着てるローブ。
あれ、裾が妙に長くてヒラヒラしてて、ついでにフードがついてて
さ。
俺、ずっとてるてる坊主みたいだと思ってたんだ。
「馬鹿にするなー!!」
アンネがペチペチ叩いてくる。
聖女見習いってなんだっけ。
聖職者ってなんだっけ。
こんな暴力振るっていいんですか、女神様。
「で、俺に何の用？」
「……あんたねぇ、私……9：00に聖堂に来てって言ったじゃない」
そんな事もあったなぁ。
たしか、晩飯のこと考えてて適当に聞き流した気がする。
「ソウダッタソウダッタ」
「……気になんないの、結果」
あー。
試験の結果な。
「そりゃ、通ってるに決まってるだろ。
俺ほど有能な男はそうそういねえからな」
アンネが呆れたような目を向けてくる。
その上、思いっきりため息をつく。
なんだそれ。
その、残念なものを見るような目は。

「この先が思いやられるわー」
「先があるってことは通過してたってことだな。
よし、朝飯食いに行こうぜ」
「なんか……もやもやする」
「細かいこと気にすんな。
老けるぞー」
「誰のせいでもやもやしてると思ってるの!!」

ここのサンドイッチは美味しい。
レタスが美味しいのか、パンが美味しいのかなんなのかよくわからないけど。
これにツナとかそういう系のが入ってたらさらに美味しいと思う。
「ツナサンド食べたい」
「え」
「なんだよ」
アンネがあり得ないといった顔をする。
「……いや……私、魚嫌いだから……」
「子供みたいだな」
「うるさい。
……私がいた修道院、北方のほうでさ。
冷凍の不味い魚しかなかったのよ」
傷んだ魚は確かに不味い。
腐ってなかったら食うけど。
「……こんど俺の故郷に来たらいい。
新鮮な魚、食わせてやる。
新鮮なヤツは旨いぞ」
故郷……っていうか、まあ……故郷か。
俺が長らく住んでたのは港町から近い村だ。
よく新鮮な魚が来ていた。
肉よりも魚の方が食卓に並ぶ回数は多かった。
「……まぁ、期待しないで待っとくわ」

「そこは期待しろ」
「だって嫌いなものは嫌いだもーん……」
もーん……って子供かよ。
小さい子どこもか。
アンネ自身もそう思ったようで、恥ずかしそうに咳払いする。
「あー、あと明日。
よろしくね……頑張ろう」
「ん？　あ、ああうん」
そういや、明日最終試験だったな。
……これで良いのかって思うことはあるけど。
でも、これで良いんだよなって悩むのは俺らしくない。
「私、ずっと聖女になりたくってね。
誰の助けになりたい、役に立ちたいって。
そりゃ今の私だって色々、人のために出来ることはあるけどね。
でも、聖女になって力を授かったらもっといろんな事が出来る」
少し頬を赤く染めて、アンネが話す。
気恥ずかしさってより、ちょっとした興奮だと思う。
何て言うか、純粋なやつだなーって思う。
人のために何かしたい、か。
それを堂々と言えるって、素晴らしいよな。
俺には到底できない芸当です。
「ま、頑張ろうや」
「うん」

4．最終試験　ｓｉｄｅ：アンネ

夕陽が沈むとき。最終試験が始まる。
集合場所は試練の間の扉の前。
空が茜色に染まり始めると、ちらほらと聖堂に人が集まってくる。
ダレン、ちゃんと来るかな。来るわよね……？
流石にここ大一番で遅刻とかすっぽかすとかはないと思いたい。
今までも試験にはギリギリ間に合ってたし。
「待ったー？」
思ったより早くダレンが来た。
よかった。
……というか、その格好。
一応、聖騎士候補としての服装は教会から支給されている。聖寮（聖騎士候補養成機関）出身の聖騎士候補はみんなそれ。他所から来た人もだいたいそれを着てる。
っていうのにさ……思いっきり普段着じゃない。
相変わらず寝癖なのかなんなのかわからないボサボサの茶髪。ヨレヨレの白Tシャツに、赤いジャケット。緩めの黒いズボン。あ、靴紐片方ほどけてるじゃない。
相変わらず”ちょっと雑貨屋寄ってくる”みたいな格好。
緊張感がないというか、空気読めないっていうか。
……それがダレンの良いとこかもね……なんて思ったり。
……思わなかったり。
「ちょっとだけ待った。
行くわよ、ついてきてね」
私についてこないと部外者と勘違いして弾かれそうだし、あいつ。
聖堂入ってすぐは礼拝堂になっている。
その礼拝堂の左右に細い通路がある。
その左が、試練の間に続く階段への通路。
赤い絨毯にステンドグラスが鮮やかな影を落としている。
「……今日、全然人いねえな」

「人払いしてるからね」
「わざわざ？」
「わざわざ。最終試験は神様が使徒を選ぶ場だから、部外者は立ち入り禁止だって……神聖な儀式らしいわ」
「へえ……」
興味なさそうな返事が返ってくる。
あんたが聞いてきたんじゃない。
ダレンの視線は右手の甲に向いていた。フェデーレの紋章。女神様の良き信者である証……ダレンみたいなのも一応、フェデーレ。
「聖騎士になるってことは、アポストルになるってことだよな」
「そうだけど……なんか、その言い方、嫌」
善神・邪神問わず力を授かって使徒になった人間はアポストルと呼ばれる。フェデーレの紋章が、その神を表す紋章になる。
確かに聖騎士も聖女も、アポストルだけど。
「聖女と聖騎士は特別よ。
聖女は女神アシリア様の力を授かって、聖騎士は聖女を守るために善神の力を授かる。女神アシリア様に認められて使徒になる。これって凄いことよ。
巡礼者は女神様の想いの代行者なの」
「……そういうの、よくわかんねえわ俺」
「そう言うと思ってた」
普段なら腹のたつ軽薄な発言だけど、今はその軽さが有り難く思う。
気負わなくてすむし、緊張しない。
赤い絨毯の廊下の終わり。
小さな木製の扉がある。
ダレンがそのドアノブを捻って開ける。その先は螺旋状の階段が続いている。
「うっわ、すっごい階段。
しかも上りだし……」
ダレンがあからさまに嫌そうな顔をした。

階段を上りきった聖堂の最上部。
大きな扉の前に、聖女見習いと聖騎士候補がいた。確か私達を入れて１０組だから、２０人。
「お前達で最後だな」
扉の前に立っている男の人がそう言うと、辺りは静まり返る。
「ラヴ様、此方へ。
道を開けろ」
男が私達の後方に向けて頭を下げる。
ラヴ様……。まさか……。
周囲がざわつく。
「え……何……誰？」
ダレンは何だかよくわかってないようだけど。
さっと作られた通り道。
そこを扉に向けて、女性が歩いていく。
艶やかな銀髪に長身、透けるように白い肌。
そして右腕の羽の紋章。
……本物のラヴ様だ。
「ラヴ・シンク様。女神アシリア様の妹とされるアリア様の使徒……
ううん写し身って呼ばれてるすごい人……」
「胡散臭……」
「失礼なこと言わないでよ」
扉にラヴ様が手を翳す。
白い光が扉の装飾に走り、ゆっくりと扉が開いていく。
「入れ」
男に促され、私達は試練の間に足を踏み入れた。
中は案外、質素。真っ白な壁と、天井に描かれた大きな魔方陣。それ以外は何もない。
ラヴ様が試練の間中央に立つ。
「これより最終試験を始める」
いよいよね。

何だろう、最終試験の内容。
何が来たって、私は負けない。
必ず……聖女になってみせる。
「殺し合え」
「え」
「最後に残った一組が聖女と聖騎士。巡礼者となる。
貴様らの女神への忠誠心を見せよ。ここで命を落とすような弱いものは女神の代行者足り得ない」
背後で扉が閉まる音がした。
殺し合えって……何？
どうして……？
「冗談ですよね……」
聖騎士候補の一人が、ひきつった表情で呟く。
ラヴ様は何も答えない。
つまり、本当？
「私……やだ……そんなの出来ない、出して!!」
まだ幼さの残る聖女見習いが、扉を叩く。
そういえばあの扉……どうやって開けるの。一人で押したって開きそうにない大きさだし、そもそも蝶番がない。
一種の魔術で開閉しているのだとしたら。
「私達……ここから出れないんじゃない？」
生きて出たいなら、殺して生き残れってこと？
そんな……それって。
……みんなで出る方法は……。
「……俺は死にたくない。
お前らが死なないと出れないっていうなら、殺る」
一人の聖騎士候補が武器を構えた。
それがこの場の微妙な空気を壊す。みんな次々と武器を構える。
やだ……どうして……。
女の子の悲鳴が響いた。
茶髪の少女が、斬られた肩を押さえて蹲る。

「悪く思わないで。
私は……私は……!!」
切りつけた少女がナイフを振りかざす。
その少女を狙うの細身の槍。
なんで……みんな……殺し合わなきゃ……。
「ぼさっとすんな」
ダレンが声をかけてくれる。
「うん……」
「死にたくないならしゃんとしろ」
ダレンの表情は少しだけ険しい。
でも、困惑したり迷ったりしてる様子はなかった。
どうして覚悟を決めれるの。
人を殺す覚悟なんて……。

5．ミカハヤヒ　ｓｉｄｅ：ダレン

何のために殺し合うのか。
俺は人を殺すために来たわけじゃない。ここにいる奴等は〝巡礼者になりたい〟って人を守りたいって思ってここに来たんだろ。おんなじ考えを持った人同士（俺を除いて）殺し合えってか。
……こんなのってないよな。
ぼさっとすんな。
そう、アンネに声をかけたのは他でもない俺。こうなったからには殺らねばならない、生きるために……そう覚悟を決めたはずだったんだけど。それなのに、割りきれない。
いや、割りきれて良いものじゃないよな、普通さ。
巡礼者は人を守る存在なんだろ。
人を守る巡礼者になるために人を殺す？
酷い矛盾で、エグい皮肉だ。人を助けてまるで神様のように崇められている存在が、人殺し。何の冗談だ。
アンネに視線を移した。
『巡礼者になりたい。
人を助ける存在になりたいから』
人を助けるためただ真っ直ぐ生きてきたアンネに、人を傷つけろって言うのか。殺せって言うのか。
非情になれとでも言うのか。
切り捨てる覚悟を持てとでもいうのか。
左からの殺気に剣を構える。
聖騎士候補の一人が振るってきた剣。受け止めるけれど、軽い。
全く気が乗ってない。
困惑したような瞳と目があった。
「こんなの　おかしいじゃねえか」
決まりだ、規則だ、掟だ、女神の教えだ……ごたごた煩いんだよ。
規則も掟も、人を守るためにあるんだろ。
人を傷つけるようなものはクソだ。しかも、その教えを忠実に守っ

た人間に牙を剥くんだ。
……今に始まったことじゃねえ、昔っからそうだったじゃねえか。
教会はさ。
はっきり言ってやる。
”そんなの間違ってる”
女神の教えだかなんだか知らないけど、人を傷つけるなら壊れてしまえ。
いや、俺が壊してやる。誰も壊せないって言うんなら、俺が代わりにぶっ壊してやる。
恨みならいっぱいあるんだよ。
―地獄にだろうが何処にだろうが落ちてやるよ―
足元が崩れて世界が暗転した。
上下左右もわからない。
宙に浮いたような感覚。
『地獄に落ちてやる、か』
聞いたことのない男の声が響く。
辺りを見渡したけど、誰もいない。
『面白い。壊してみろ、世界を。
我が名はミカハヤヒ。
力を得たいならば　手を　伸ばせ』
目の前に光る球体が落ちてきた。
本能が叫ぶ。
それを手にしたら戻れないって。
でも、直感が囁く。
それを手にすれば、この現状を変えられる。
この場にいる全員を救えるなら……絶望させなくて済むなら。
何も迷うことなんてない。
その光を、右手で掴んだ。
世界が急速に色と方向と音を取り戻していく。
それと同時に、右腕に燃えるような痛みが走った。なんだこれ。内側から燃えてるような感覚。

剣が手から滑り落ちる。
斬られたかと思った。右腕に目を向ける。
あ……。
「お前……まさか」
ラヴとか名乗っていた女の声が聞こえる。
試験官が試練の間から出ていく様子が視界の端に写った。
すぐに、騎士団の連中が乗り込んでくる。
右手の甲に浮かぶのは、剣に絡んだ蛇のような紋章。
ミカハヤヒ……あの言葉からしてつまり邪神の紋章だ。
俺も晴れて、アポストルに……その上へレティックの仲間入りってことか。
力って……そういうこと、かよ。
そりゃもう、後戻り出来ねえし社会的に死んだも同然だけどよ。
このふざけた教会の教えをぶっ壊すには丁度良いや。
もともと”女神様”なんか信じちゃいねえ。
異端者、破門者、上等。
「ぶっ壊れろおおおおお!!」
紋章が輝く。
あり得ないほどの力が右腕に集まってくるのがわかる。
それこそ制御できないくらいの力が。
集まり続けた力はやがて、暴発した。
衝撃波と熱風が周囲に迸る。
「ダレン!!」
アンネの呼ぶ声が聞こえた。
声のした方に顔を向ける。
焔の渦のなか、アンネが俺に手を伸ばした。